

タイトル	村岡典嗣と波多野精一：響応する二つの「学問的精神」
著者	安酸，敏眞
引用	北海学園大学人文論集，39：199-238
発行日	2008-03-00

村岡典嗣と波多野精一

— 嚮応する二つの「学問的精神」—

安 酸 敏 眞

はじめに

日本思想史家の村岡典嗣は、東北帝国大学を定年退官した直後の昭和21年4月13日、戦時中の食糧難による栄養失調と長年の無理がたたって、仙台の病院で静かにその生涯を終えた。享年62歳（満61歳）であったが、当時岩手県千厩に疎開中の宗教哲学者の波多野精一は、四十星霜にわたる愛弟子を失った悲痛さを、複数の親しい友人や弟子たちに宛てて書き送った。4月25日付けの香川鐵藏宛の書簡では、波多野は四十年来の愛弟子であり友人の村岡の逝去を次のように記している。

拝啓 昨夜書き残した事を一筆申し上げます。

その人の存在はかねてより御存じの事は、いつぞやの御手紙で承知致してをりますが、日本の研究家として令名ある、東北帝大の村岡^{ツネツグ}典嗣君の事についてであります。君は私の四十餘年来の友であります。過日つひに^{えきさく}易簣致しました。一月より栄養失調のため臥床、専ら医療と静養とに力を盡してをりましたが、つひに再び起つ能はざるに至つたのです。君が早大に入學すると殆ど同時に私は同大學の講壇に立つことになり、従つて爾來四十餘年の交りを續けて來たことになります。學生時代及び卒業後數年は、ギリシア思想とキリスト教との熱心な研究者でありましたが、故佐々木弘綱（信綱氏の先代）の親戚にあたり、少年時代は佐々木家に育つた関係より、少時より國學及び和歌に親しみあり、ギリシア思想を愛するに至つたのも、萬葉時代の

國民感情とギリシア人の感情との類似に打たれ引寄せられた結果であり、西洋文化の精髓を把握するには、更にキリスト教をも等閑視するを得ないことを悟つて、ドイツ宣教師につきその經營してある神學校に通學するやうになりました。この經歷に徴しても、いかに純眞な *philosophia* (愛智, 眞理の熱愛) にもえてゐたかゞわかります。さうしてゐるうちに、研究の根本資料たるギリシア語原典を自由に利用するの到底自分の力の及ぶ所でないことを率直に自認するに及び、日本の文化の研究に轉向致しました。家庭の財政は頗る窮乏を告げてをりましたので、随分苦勞致しました。こまかい事は申上げませんが、今日まで學界隨一の名著たる地位を保持してゐる「本居宣長」は君の二十七八歳頃の處女作であります。私はこの名著をすでに原稿の時に讀ませてもらつた、忘れ難き體驗をもつてをります。廣島高等師範學校が、學歷も、一般の考へよりいへば、貧弱である君を一躍講師、間もなく教授に迎へたのは、實に劃期的の美舉で、特に力を入れてくれた故内田銀藏君、西晋一郎君の兩君の公平無私な態度は、私の今日まで敬服と感謝とをもつておもひ起す學界の美談であります。東北帝大の文學部の創設された時、君は日本思想史の教授として迎へられて今日に及びました。

君は本年數への六十二歳、この三月で停年退官する筈でした。退官後は、今までの研究をまとめて「日本思想史」を著述すべくかねてより計畫し意氣込んでをりました。又學界の賞讃を博してゐる「本居宣長全集」は二十數冊を豫定し、今までにその四分の一しか出てをらず残りはこれからの仕事となつてをりました。君の早逝は實に惜しみても餘りあるものであります。

近頃學者間に榮養失調のためたふれるものが頻出してをります。私の直接交りある人々のうちでも、西田幾多郎、吉田靜致(倫理學者)、桑木或雄(嚴翼君の令弟、元九大教授)の諸君とこんどの村岡君とを數へることが出来ます。

闇買ひや不正利得の手腕も財力もないものは、時局の最大の犠牲者と

なりつゝあるのです。

では、御きげんよう¹。

その一週間後の5月2日には、当時埼玉県浦和市に寓居していた田中美知太郎に宛てて、次のような書簡をしたためている。

貴君の目ざましき業績を見るにつけて、なつかしく想ひ起すは、私の早稲田大學時代に得た最初の *ἑταῖρος* [編者注・仲間] 數十年の間私の最も親しき友の一人であつた、故の東北大學教授村岡典嗣君の夭折であります。君は竹柏園の創立者佐々木弘綱翁の身内のものとして、同翁の家に少年時代を送つたためせう、年少の時より古事記萬葉を活かしてゐる、日本古代精神の雰圍氣のうちに育まれました。大學に入るに及んで、私の講義によつてはじめてギリシアの文化及び思想に接し、それら二つの精神の類似に打たれてギリシアの尊崇者となり、傍ら西洋精神の深みを究めるために、十九世紀の *historische Theologie* に親しみました。かくてはじめはギリシアの研究を一生の事業とするつもりになつたやうです。ところが、ギリシア語の學習が、即ち眞の文獻學的研究の基礎となり得る程度の古典語の體得が自分の力の及び難い所であるを悟るに及んで、再び幼少時代以來の養ひ親である、精神的故郷に立ち歸りました。これは、同君の人間として又學者としての純眞さを物語るものであります。それで、生活の苦勞に悩まされてゐる中で、僅かな夜分だけ與えられてゐた暇の時間を利用し、殆ど驚異的努力をそゝいで、僅か二十七八歳の若さで、今日に至るまで殆ど *klassisch* の地位を保つてゐる「本居宣長」の名著を公にすることが出来ました。この書は、當時全く世に顧みられず、五百部印刷したものが僅か半分位しか賣れなかつたのです。著者は相變らず貧と戦ひつゝ研究をつゞけてゐましたが、やつと十年の後廣島文理大學の内田教授（國史）と西教授とに認められ、一介の貧乏書生が同大學の教授にひろひ上げられたのです。もうそれ以後は事が順調に進むのみであ

りましたゆゑ、こゝに御披露申上げるを割愛致しませう。同君の西洋古典文獻學における造詣は、早くその方面の研究を見棄てたので、量においては至つてみすばらしいもので、哲學史方面では、John Burnet、文學方面では Gilbert Murry のホメロス研究、一般的には August Böckh の Enzyklopädie 位しか精讀していなかつたやうであります。十九世紀の西洋古典文獻學の精神は頗る深く體得してをり、本居宣長の研究も、一つには、日本の學者の中で、眞に同じ精神に(以下紛失)²

波多野精一はこれ以外にも、佐藤洽六、宮島綱男、松村克己などの友人・知人にも、同様の趣旨の書簡をしたためているが、ここに詳しく引用した二通の手紙からだけでも、彼一と村岡典嗣の間の特別な師弟関係が読み取れる。波多野は村岡のことを「最初の ἐταῖρος」、「最も親しき友の一人」と称しているが、この ἐταῖρος というギリシア語が、波多野にとって村岡がどういう存在であったかを端的に物語っている。この語は、一般的に、a comrade, companion, mate, friend を意味するが、同時に、a pupil, disciple をも意味する。両者の師弟関係は、いわば自明の事柄として扱われてきているが、その中身は必ずしも明らかではない。そこで本稿は両者の学問的關係を、残されている種々の資料から炙り出そうと試みるものである³。

一 波多野精一と村岡典嗣の生い立ちと出会い

まず、両者の出会いとその後の接点を確認するために、波多野と村岡の生涯と学問業績を、それぞれ信頼できる年譜資料に従って、おおまかに粗描してみよう⁴。

波多野精一は、明治10(1877)年7月21日、長野県筑摩郡松本町に生まれた。幼少の頃父母に伴われてはじめ長野に出て、ついで一家上京して麹町区飯田町に住み着いた。高等師範学校附属中学校から第一高等学校を経て、明治29(1896)年東京帝国大学文科大学に進み、哲学科に学んだが、

全課程を通じてつねに優秀な成績を示し、明治 32 (1899) 年大学卒業に際しては恩賜の時計を与えられた。彼は卒業後直ちに大学院に進学して、ケーベル博士 (Raphael von Koeber, 1848-1923) の指導の下に近世哲学史を研究したが、明治 33 (1900) 年 3 月には、東京専門学校 (現早稲田大学) 講師を嘱託され、西洋哲学史を講義し始めた。翌明治 34 (1901) 年には、処女作『西洋哲学史要』を出版したが、これは碩学クーノー・フィッシャーの十巻本の大著『近世哲学史』*Geschichte der neueren Philosophie* を咀嚼して書き上げられた、本邦初の本格的な哲学史として高い評価を得た。明治 35 (1902) 年、彼は植村正久から洗礼を受け、キリスト教徒となった。明治 37 (1904) 年には、ドイツ語論文『スピノザ研究』を提出して東京帝国大学大学院での研究を修了した。同年、彼は早稲田大学の奨学資金を得て、明治 37 年から二年間、ドイツに留学して、ベルリン大学とハイデルベルク大学で学んだ。ベルリン大学ではハルナック (Adolf von Harnack, 1851-1930) やプフライデラー (Otto Pfleiderer, 1839-1908) の講義を聴講し、ハイデルベルク大学ではヴィンデルバント (Wilhelm Windelband, 1848-1915)、ヨハンネス・ヴァイス (Johannes Weiß, 1863-1914)、トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923)、グイスマン (Adolf Deißmann, 1866-1937) などの講筵に列席した。明治 39 (1906) 年 3 月帰朝し、早稲田大学で教鞭を執ったが、4 月には倉田やすと結婚し、牛込区市ヶ谷に寄寓した。明治 40 (1907) 年 8 月、東京帝国大学文科大学講師を嘱託され、9 月より「原始基督教」を講義し、翌明治 41 (1908) 年、この講義を整理して『基督教の起源』と題して出版した。明治 42 (1909) 年 7 月 24 日、先に提出していた『スピノザ研究』によって文学博士の学位を授与された。その後、早稲田大学講師として研究・教育に研鑽を積んでいたが、いわゆる「早稲田騒動」に関連して、大正 6 (1917) 年 9 月 30 日、早稲田大学講師を辞任した。その二ヶ月後に京都帝国大学文科大学の招聘を受け、大正 6 年 12 月 4 日に京都帝国大学教授に任ぜられ、宗教学講座担任を命ぜられた。大正 11 (1922) 年、「宗教学第二講座 (基督教学)」の設置とともにこれを兼担し、昭和 2 (1927) 年に兼担を解かれて分担となり、さらに昭和 12 (1937)

年3月には、「第二講座」の担任者（「第一講座」を分担）となり、7月31日に定年退官するまでの短い期間、基督教学講座の初代の教授を務めた。著作の発表を控えた時期を経て、昭和10（1935）年から昭和18（1943）年にかけて、三部作となる代表作『宗教哲学』、『宗教哲学序論』、『時と永遠』を順次発表し、波多野宗教哲学と称される独自の体系を完成させた。京都帝国大学を定年退職した後は、東京杉並区の養嗣子雄二郎およびその妻八重子と同居したが、戦禍が激しくなった昭和20（1945）年3月29日から終戦後の昭和22（1947）年5月までは、八重子の実家の岩手県東磐井郡千厩町に疎開した。同年6月には玉川学園小原國芳の招聘に応じて玉川学園大学教授に就任したが、すでに病を得ており、昭和25（1950）年1月17日に永眠した。享年73歳。

一方の村岡典嗣は、明治17（1884）年9月18日、東京市浅草区森下町一番地に、丹波国山家藩江戸詰藩士村岡典安^{つねやす}の長男として生まれた。幼少期、佐佐木家に寄留し、佐佐木弘綱（本居春庭の弟子足代弘訓門下）の薫陶を受ける⁵。明治28（1895）年4月、開成尋常中学校に入学し、明治34（1901）年3月卒業。同年4月、東京専門学校高等予科に入学し、翌明治35（1902）年7月卒業。同年9月、早稲田大学文学科（哲学専攻）に入学。波多野精一に師事し、西洋哲学を学ぶ。明治39（1906）年7月、早稲田大学を卒業し、同年9月、独逸新教神学校入学。神学に関する英語・ドイツ語の講義を聴講し、明治40（1907）年7月、同神学校を卒業。同年6月12日、波多野精一と共訳でサバティエの『宗教哲学概論』を出版。明治41（1908）年、柳下起家^{やぎしたきか}と結婚し、東京府大森に住み始める。同年4月、ヘラルド株式会社内日独郵報社に入社し、週刊新聞 *Deutsche Japan-Post* の記事・論説の翻訳に従事。明治44（1911）年2月、処女作『本居宣長』を出版。大正3（1914）年9月、対独宣戦布告により、日独郵報社が解散となったため、同社を退職。同年11月、ヴィンデルバントの訳書『近世哲学史 第壹 近世初期の部』を出版。大正4（1915）年春、母校早稲田の講師に迎えられ、大正5（1916）年7月27日には、陸軍士官学校陸軍助教（英語）に就任。大正8（1919）年5月21日まで、この職にとどまったが、早稲田の講師職の方は、

いわゆる「早稲田騒動」のために、大正6（1917）年の秋に辞職。大正9（1920）年2月9日、広島高等師範学校教授（徳育専攻科）に就任。大正11（1922）年4月29日、東北帝国大学法文学部教授に内定。文化史学研究のため、二年間の在外研究（独・仏・英）を命ぜられる。ヨーロッパ対在中、トレルチ、マイヤー（Eduard Meyer, 1855-1930）や、日本学者チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）、フローレンツ（Karl Florenz, 1865-1939）などのもとを訪れる⁶。大正13（1924）年3月20日、二年間のヨーロッパ在外研修を終えて帰朝する。4月25日、東北帝国大学法文学部教授に着任し、文化史学第一講座（日本思想史専攻）を担当する。それ以後、昭和21（1946）年3月30日に定年退官するまで、東北帝国大学に奉職して、日本思想史学の研究に励む。昭和10（1935）年4月には、東京帝国大学文学部講師（日本倫理思想史）を委嘱され、昭和19（1944）年3月までこの責務を果たしたが、それと並んで昭和12（1937）年5月には、東京文理科大学教授（国体論）を兼官した（1946年3月30日まで）。さらに昭和15（1940）年4月には、津田左右吉の後任として東京帝国大学法学部政治史学第三講座（東洋政治思想史）講師を委嘱され、昭和17（1942）年9月30日までこの責務を果たした。この間『日本思想史研究』四巻、『日本文化史概説』などの著書や各種の古典の校訂などを手がけ、まさに日本思想史研究の礎石を築いた。そして定年退官後十日あまり経った、昭和21（1946）年4月13日、不帰の客となった。

二 若き村岡典嗣とキリスト教

両者の略年譜から明らかになることは、波多野と村岡の出会いは、明治35（1902）年9月、村岡が波多野の教える早稲田大学文学科に入学したことに始まり、波多野のドイツ留学——明治37（1904）年から明治39（1906）年3月まで——を挟んで、とりわけ帰朝後の一、二年の間に、かなり濃密なものに発展したということである。村岡は明治39（1906）年7月に早稲田大学を卒業すると、9月には独逸新教神学校に入学している。彼は自由

神学を標榜するこの神学校で、神学に関する英語・ドイツ語の講義を聴講しつつ、サバティエの『宗教哲學概論』⁷の翻訳を完成し、明治40(1907)年6月に、波多野と共訳のかたちでこれを内田老鶴圃から出版している。波多野はこの訳書の「序」において、次のように述べている。

サバティエの宗教哲學概論は、宗教哲學の書としては少なからぬ缺點を有す。……然れども、宗教の何ものたるかを、平易に説き得たる、本書のごときは罕なり。……余自身は、本書がわが國の人々に宗教又特に基督教を解する助けとなることあらむことを望むこと切なり。

是故に、村岡典嗣氏が本書翻譯の企圖あるを聞くや、余は喜んで、氏にわが微力を貸しぬ。氏の翻譯は著實に原著の意を傳へむを力めたるものにて、世の杜撰なる翻譯物と類を異にす。かつ余自身も責任を分つものなり。然れども余の与へる助力は、甚だ小なる範圍に限られ、共譯と稱するも、翻譯の勞力は全く氏に屬せり。若しこの翻譯が、幸にして世に認められ、又は世を益することあらば、その誉れも亦氏にのみ屬すべきものなり。

明治治四十年四月十四日

波多野精一⁸

ここに波多野と村岡の精神的連帯の最初の記念碑が打ち立てられたのであるが、この前後の村岡の様子は、彼の無二の親友であった吹田順助の手になる追悼・回想文によって、あらましを知ることができる。明治30(1897)年に、東京府開成尋常中学校の同級生として知り合ってから以来、生涯にわたって気が置けない友人として交流してきた吹田によれば、「早稲田を出てから、村岡は当時、小石川区富坂の横町にあった独逸神学校にはひり、学校の直ぐ前の下宿に居を移した。校長はオストワルト博士であった。どうして村岡が独逸神学校にはひつたかに就いては、或は波多野先生の示唆もあつたのかもしれないが、今ではよく覚えてゐない」という。吹田も当時、ちょうど小石川の徳川邸の塾にいたので、村岡とは「始終往来した」。村岡

が「サバティエの『宗教哲学概論』を訳して出したのも、その頃」であり、まだ学生であった吹田は、「村岡がもう堂々たる訳業を発表したので」、「うらやましさを感じた」そうである。「その後村岡はオストワルト博士主宰の日独郵報社の社員として、独文和訳をやるようになった。その頃は大森に住居をかまへ、きか子さんも夫人として、一緒になった。もう大森にゐた頃から本居宣長に着眼し、いろいろ資料をあつめてゐたやうに記憶するが、これはあまりはつきりしない。日独郵報社は横浜にあつたので、村岡からよく横浜の話をきいた」⁹という。

ここに出てくる「独逸神学校」であるが、これは「普及福音教会」というプロテスタントの教派によって設立されたものである。この教派は、ドイツにおいて1884年ワイマールに結成されたDer allgemeine evangelisch-protestantische Missionsvereinという団体を母胎として成立した¹⁰。明治10年代の終わりから明治20年代のはじめにかけて、「自由キリスト教」と称される普及福音教会（明治18年）、ユニテリアン（明治20年）、ユニバーサリスト（明治23年）の三派が相次いで渡来したが、普及福音教会に関して言えば、明治18年に最初の宣教師シュピンナー（Heinrich Wilfrid Spinner, 1854-1918）が、21年にシュミーデル（Otto Moriz Schmiedel, 1858-1926）が来日して、教派拡勢に努めた。これら三派はいわゆる「新神学」を導入し、わが国のキリスト教界に大きな波紋を起こした。これらの三派の間には多少の相違はあるものの、聖書の歴史的批評という点では共通性が見られた。このうちの東京の小石川上富坂を拠点とする普及福音教会は、明治20（1887）年4月に、教会の並びに神学校を設立し、明治中期以後の神学論争において、自由主義神学の中心として重要な役割を果たしたといわれている¹¹。筆者はこの神学校に関する仔細を知らないが、その神学校の基本的な性格については、この教派の宣教師として来日したシュピンナーの「滞日日記」とその他の遺稿から、ある程度のことを類推することができる。というのは、「一八八八年東京新教神学アカデミーのためのプログラム」と題された草稿には、次のように記されているからである。

一、新教神学アカデミーはドイツの福音主義神学大学の手本にしたがって設立される。

またここで学ぶ者たちに、キリスト教に基づく完全な哲学的、神学的教養を提供する。

二、授業はドイツ語ないし英語と日本語でなされる。

三、研究をドイツの大学、あるいは他の国の同じ水準の教育施設で終えまたあらゆる試験に合格した人たちが教授陣として働く。

四、正規の学生として受け入れられるのは、中学校を終了し、右の神学大学学部と一致する学科コースについて行くことのできるキリスト者である。そのためにまだ十分な能力を持たずまた必要な予備知識を得ようと欲する者たちのためには、可能なかぎり特別な処置がとられる。

五、特にその卒業試験にパスした学生は、願いにより、当アカデミーを介し、その研究の完成を目的として、一二年ドイツの一大学へ受け入れられる。

六、コースは八ゼメスターで、四年以上にわたる以下のカリキュラムにしたがう。

1 第一ゼメスター

ラテン語、ギリシア語、論理学、哲学史、ヘブライ語（選択科目）

第二ゼメスター

神学要綱、ラテン語、ギリシア語、哲学史、教会史、心理学

2 第一ゼメスター

ラテン語、旧約聖書、ギリシア語新約聖書、哲学史、教会史、心理学

第二ゼメスター

ラテン語、旧約聖書、ギリシア語、新約聖書、教会史、特に護教論を顧慮した形而上学

3 第一ゼメスター

ギリシア語新約聖書，教会史，教理史，宗教史

第二ゼメスター

ギリシア語新約聖書，宗教史，組織神学

4 第一ゼメスター

イエスの生涯，組織神学，説教学，教理教授法

第二ゼメスター

組織神学，牧会神学，礼典学，教会管理学

七、各ゼメスターの終わりに試験が課せられ、成績が付けられる。合格しなかった者は当該ゼメスターを繰り返さなくてはならない。例外的に個々の学科の追試験が次のゼメスターの最初に認められる。

第四ゼメスターの最後に、哲学の試験が行われる。それは以下の学科を含む。

ラテン語，哲学史，心理学，形而上学，旧約聖書，教会史

第八ゼメスターの終わりの神学の主要試験は、哲学の試験で取り扱われないすべての学科を含む。この試験に合格した候補者は卒業証明書を受け取る。これによって彼は牧師職執行可能とされ、牧師の称号を持つことが許される。

八、アカデミー入学にさいしてここで学ぶ者は以下の学科の試験に合格しなければならない。

1 漢文， 2 数学， 3 地理， 4 歴史， 5 自然科学， 6 ドイツ語，
あるいは英語

願書は毎年九月一日までに提出されなければならない。例外的に二月の初めにも受け入れられる。

高等中学校，あるいはドイツ協会学校，あるいは同じ水準の中学校を卒業した生徒は試験なしに受け入れられる。

第一ゼメスター・クラスより高次に受け入れられることを欲する者は、必要な予備知識について証明されなければならない。

九、学期は九月七日と二月一日に始まる。休暇は盛夏の時(七月七日-九月六日) 以外は、キリスト教の休日祭日，日本の三祝日，新年の

十四日、イースターの五日と決められている。

一〇、アカデミーの学生は七千巻を含む一般的学問図書を利用する。

一一、授業は、後に普及福音教会のために活動することを約束するこの教会の会員に対しては無料である。

その他のここで学ぶ者たちの授業料は月々三円、毎月十五日支払いのこと。

一二、ここで学ぶ者はすべて保証人を一人立てねばならない。

一三、非キリスト教的操行には警告、場合によっては、一時的停学、最終的には除籍とされる。

一四、保証書を備えた入学許可の申請書類は常時照会する署名者の一人に交付されるものとする。

東京駿河台鈴木町十二番地	シュピンナー
七番地	シュミーデル
普及福音教会代表	草間 ¹²

上記のカリキュラムは、ドイツの大学に準拠しているといわれるが、残念ながらこの当時のドイツの神学部のカリキュラムについて、筆者は正確な知識と情報を持ち合わせていない。だが、この時代のドイツの神学生の事例と比較してみれば、その異同についてある程度のことかわかるとと思われる。そこで筆者が知悉しているエルンスト・トレルチを例にとり、当時のドイツの神学生の履修モデルを一瞥し、それとの比較で独逸新教神学校について考えてみたい¹³。

トレルチは、一八八四／八五年の冬学期から一八八八年の夏学期まで、エアランゲン、ベルリン、ゲッティンゲンの各大学で学んでいる。彼が履修した科目・時間数・教師名を列挙すれば、以下のごとくである¹⁴。

一八八四／八五年冬学期 (Friedrich-Alexanders-Universität Erlangen)
古代教会史 5時間 ハウク

村岡典嗣と波多野精一（安酸）

教育学・教授法 4時間 ツェツシュヴィツ
哲学的法理論・国家理論 4時間 クラース
心理学 2時間 クラース

一八八五年夏学期（Friedrich-Alexanders-Universität Erlangen）

パウロのコリント人への第一の手紙について 3時間 ツァーン
教義学 第二部 5時間 フランク
組織神学のためのゼミナールの実習 2時間 フランク
認識論と形而上学 4時間 クラース
宗教哲学 2時間 クラース

一八八五／八六年冬学期（Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin）

キリスト教倫理学 4時間 カフタン
ヤコブ書講解 1時間 カフタン
組織神学の会 2時間 カフタン
ヨーロッパ国家制度の歴史と政策 1時間 トライチュケ
王立博物館を利用してのギリシア・ローマの造形芸術の歴史 4時間
クルツィウス
物理学的人間学 デュ・ボワ＝レーモン

一八八六年夏学期（Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin）

キリスト教教義学 普遍的な第一部（弁証学） 4時間 カフタン
教義史 5時間 カフタン
組織神学の会 2時間 カフタン
ローマ書講解 4時間 ヴァイス
宗教改革の時代の歴史 5時間 トライチュケ

一八八六／八七年冬学期（Georg-August-Universität Göttingen）

教義学 第一部 5時間 リツチュル
創世記講解 5時間 シュルツ
初期八世紀の教会史 6時間 ロイター

一八八七年夏学期（Georg-August-Universität Göttingen）

教義学 第二部 5時間 リッチュル
キリスト教の弁証学 5時間 シュルツ
詩編講解 5時間 ドゥーム
教義学ゼミナール 2時間 シュルツ
教会史・教義史ゼミナール 2時間 ヴァーゲンマン

一八八七／八八年冬学期 (Georg-August-Universität Göttingen)

神学的倫理学 5時間 リッチュル
宗教史 4時間 ドゥーム
実践神学 5時間 クノケ
教義学ゼミナール 2時間 シュルツ
教理問答学ゼミナール 2時間 クノケ／ヴィージンガー
説教学ゼミナール 2時間 シュルツ／クノケ

一八八八年夏学期 (Friedrich-Alexanders-Universität Erlangen)

近代の分派の本質と歴史 (メソジスト派, アーヴィング派など) 2時間 コルデ
教会法 5時間 カール
説教学ゼミナール 4時間 カスパリ

ドイツの学生の場合には、ギムナジウムでラテン語とギリシア語をみっちり学んでいるので、大学レベルで古典語を新たに習得する必要はなく、したがってもとより単純な比較は意味をなさないが、一般教育的科目として設置されている論理学、哲学史、心理学は、トレルチもこれを履修していることにまず注目したい。トレルチはギムナジウム修了後、大学に入学するまでの一年間、アウクスブルクの王立リュツェウムで学んでおり、そこでは一八八三／八四年の冬学期に、論理学・認識論・形而上学、実験物理学、人間学、文献学を、一八八四年夏学期に、芸術史、一般自然史、哲学史、実験物理学を履修している¹⁵。大学入学後に履修した一般教育的科目と併せると、そこにはトレルチ自身の問題関心の所在が顕著に示されているが、いずれにせよトレルチも論理学、哲学史、心理学をきっちり履修

している。次に気づく点は、宗教史という科目が両者のカリキュラムに共通して見られることである。これは今でいう「宗教学」に相当する科目であろうが、おそらくこの時代にはまだこの名称が市民権を得ていなかったとみえ、「宗教史」(Religionsgeschichte) という名称が一般的であったようである。ともあれ、比較宗教史ないし普遍的宗教学の視点が組み入れられていることは、ドイツの大学のプロテスタント神学部にも模したリベラルな側面を物語っている。ヘブライ語は選択科目となっているが、トレルチの場合は当然ギムナジウムでこれを履修済みなもので、ギリシア語ならびにラテン語同様、大学でこれを履修してはいない。しかし上級科目の創世記講解や詩編講解を履修していることから、ヘブライ語が読めたことは疑問の余地がない。神学プロパーの科目としては、聖書学、教会史、教理史、組織神学、説教学、牧会神学、礼典学などが配置されているが、これらの諸科目は名称こそ若干異なるといえども、トレルチが履修したものとほぼ対応している。したがって、明治中期にあつては、独逸新教神学校は（少なくとも理念的には）かなり本格的な神学教育のカリキュラムを導入していた、と見なして差し支えないであろう。

ところで、村岡がこの独逸新教神学校に、いかなる動機と経緯で入学したのか、またいかなる資格で在籍し、どのような科目を履修したのか、さらにはいつまで通っていたのかは、それを示す明確な資料が手許にないのでわからない。ちなみに、植村正久は『福音新報』（明治四十年八月八日）に、「独逸派新教神学校はケーベル、海老名、小崎諸氏の助力を得て、大ひに規模を拡張し」云々と書いているので、村岡が学んだ当時、独逸新教神学校はかなり隆盛していたと思われる¹⁶。ここで言及されているケーベルは、おそらくラファエル・ケーベル博士のことであろうから、ひょっとすると村岡の神学校通いには波多野が関与していたのかもしれないが、あくまでこれは推定の域を出ない。いずれにせよ、村岡がキリスト教に対して並々ならぬ深い関心を抱いていたことは、のちの「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」、「南里有鄰の神道思想」といった諸論文や、『吉利支丹文学抄』（改造社、1926年）の編纂・校訂などの仕事からも窺われる。波多野

は、冒頭に引用した香川鐵藏宛の書簡で、「西洋文化の精髓を把握するには、更にキリスト教をも等閑視するを得ないことを悟つて、ドイツ宣教師につきその經營してゐる神學校に通學するやうになりました」と述べているので、村岡のキリスト教への関心は、主として知的ないし思想史的な関心によるものだったと思われる。しかしみずからの内面に発する実存的・信仰的な動機によるものだった可能性も捨てきれない。吹田は、「独逸神學校に何年間、村岡がゐたか、一、二年であつたやうにもおもふ」¹⁷と記しており、正確なところは知り得ないが、池上隆史によれば、明治40(1907)年7月に、同神學校を卒業となっているので¹⁸、おそらく聴講生として正味一年間在籍したにすぎないのであろう。しかしたとえ短期間であつたとはいえ、神學校でキリスト教神學について学んだことは、のちの村岡の日本思想史家としての歩みにとって重要な意味をもったに違いない。それはともあれ、村岡は明治41(1908)年4月に、「ヘラルド株式会社内日独郵報社に入社。週刊新聞 *Deutsche Japan-Post* の記事・論説の翻訳に従事。」となっているが、吹田の回想文にしたがえば、当時の日独郵報社の主宰は、独逸新教神學校の校長のオストワルト博士¹⁹であつたということなので、おそらく村岡は神學校で知己を得たこの人物の引きで、この新聞社に入社したものと思われる。

三 日本思想史家誕生の舞台裏

ドイッチェ・ヤーパンポスト (*Deutsche Japan-Post*) というのは、横浜最初の英字新聞「ジャパン・ヘラルド」社の子会社として、明治36(1903)年に横浜で設立された新聞社で、日本語では「日独郵報社」と称した。『ドイッチェ・ヤーパンポスト』なる週刊新聞は、おもに横浜や東京等に在住するドイツ語圏出身者を対象に、ドイツ語の週刊新聞を刊行しており、そこには“Berliner Brief”という雑報以外に、とくに朝鮮や中国に関する政治、社会事情の記事などが多く掲載されていた。しかし第一次世界大戦勃発後、ヘラルド主筆オストワルトが退去を命ぜられたため、ヘラルド紙も

日独郵報もともに廃刊となった、と云われている。

われわれが驚異と思わざるを得ないのは、明治44（1911）年2月18日、村岡が日独郵報社の新聞記者として多忙な日々を送りながら、処女作でありまたいまや古典的名著として名高い『本居宣長』（警醒社、1911年）を、弱冠二十七歳で完成させたことである。この画期的な著作は、「著者が、未だこの方面の學問を、生涯の仕事としようとの決心もつきかねてをつた時分、かつまた、世界大戦の犠牲となつて廃刊した、横濱の一外字新聞の翻訳記者を主な職として、殆ど全き一日の休暇をも有しなかつた、閑のない生活状態の間に試みた研究」²⁰であった。しかもそのときにはすでに女兒が一人おり、さらにこの年の9月6日には、長男哲が誕生している。生活苦が透けて見えそうであるが、まさにそういうなかで、彼は寸暇を惜しんでこの作品を書き上げたのであろう。のちに村岡はその当時のことを振り返って、次のように書き綴っている。

当時一週中の六日は横浜に、日曜は東京に通ひ、日々の仕事の為に、極めて多忙であったので、執筆はもとより夜分丈であり、随分夜ふかしもしたし、また汽車中で日記や全集を翻したり、横浜では昼休みにおける海岸通りの散歩に、種々考へを練ったりした。またその間に、無理に時間を作って、上野の図書館や南葵文庫に通つたし、また松阪へも一度行って、鈴屋の遺跡をたづね、山室山にも詣でたりしたものの、固より始終もう少し余暇があつたならと思ひ、中学校などに勤務して、さまざまの休暇を享有する人々の境遇を、心から羨しいと思はないこととはなかつた²¹。

さて、大正3（1914）年9月、第一次世界大戦勃発後の対独宣戦布告によって、日独郵報社が解散となったため、村岡は職を失うことになったが、同年11月には、ヴィンデルバントの大著 *Die Geschichte der neueren Philosophie* の最初の部分の訳書『近世哲学史 第壹 近世初期の部』が出版されている²²。村岡はこの書の冒頭に掲げられた「凡例」において、「今

や我國は獨逸國と交戦状態にありと雖も、言ふまでもなく學問には國家的牆壁なし。歐洲戦争の結果は如何にもあれ、我國民は、殊に哲學的教養上、將來永く、獨逸に學ばざるべからず。目下國交斷絶の時に際し、この譯本を現著者に致して、敬意を表するを得ざるは、譯者として、之を遺憾とせずんばならず。大正三年十月十二日 譯者識す」²³、と記している。ここには波多野譲りのゲルマノフィルの一面が顔を覗かせている。

『本居宣長』を上梓してから三年ほど経っているのに、宣長研究に一段落ついてからこの翻訳に取りかかったものと思われるが、一方で日本思想史研究に励みながら、他方で新カント学派の泰斗ヴィンデルバントの哲学史の翻訳に挑んだのであるから、この時点までの村岡は、いわば両刀遣いで、西洋の宗教・哲学思想と日本思想史の両方を追求していたことになる。この状態がいましばらく続いたことは、村岡が宮本和吉・高橋穰・上野直昭・小熊虎之助編集の『増訂版 岩波哲學辞典』(大正11年、昭和2年増訂版第五刷)に、主に神道関係の多くの項目にまじって、「アナクサゴラス」、「エレア學派」、「ピタゴラス及びピタゴラス學徒」、「ヘラクレイトス」について執筆していることと²⁴、大正10(1921)年に広島高等師範学校でプラトンの国家論について講義していることからわかる²⁵。村岡の学殖の広さには舌を巻かざるを得ないが、このように西洋哲学史に通じていることが、後年の村岡の日本思想史家としての活動の大いなる強みとなったことは間違いない。

村岡は大正4(1915)年春、母校早稻田の講師に迎えられ、そこでは西洋哲学の講義を担当している。大正5(1916)年7月27日には、さらに陸軍士官学校陸軍助教(英語)に就任し、英語の授業も受け持っている。しかし村岡はやがて研究上の大いなる方向転換を決断した。それは大学で波多野を通して教えられた西洋哲学的知識と、佐佐木弘綱に私淑していた少年期からの国学的教養との自然な結びつきと考えられなくもないが、長男の村岡哲によれば、これはむしろ、「『西洋哲学ではとうてい自分を凌駕することはできまいから、新しい領域を開拓するように』との恩師波多野の熱心な勧めに従った」²⁶結果であったという。冒頭に引用した波多野の香川

鐵藏宛の書簡の内容ともよく符合しているが、いずれにせよ、村岡は恩師の熱心な勧奨に素直に従って、思い切って日本思想史の研究家となる方向へ舵を切ったのである。村岡は大正四、五年頃、新婚当初の大森の住まいから、牛込薬王寺に引っ越している。村岡哲が後年述懐しているところによれば、

同じころ、第一次世界大戦勃発の影響で「日独郵報」社の解散に伴い失職した父は、やがて母校の講師と陸軍士官学校の英語の助教となり、牛込の市谷薬王寺町へ居を移した。私の幼年期の記憶はほとんどすべてこの家に集中している。かなり大きな二階家だったが、後家となった祖母や年若い叔父母たちも何人か同居し、ずい分大家族であった。私は、ひとりで鶏の世話をしたり草花を育てたりすることが好きで、また夏季には、近くの「水野の原」や「戸山が原」さらに「早稲田の杜」で蝉やトンボを追いまわした²⁷。

興味深いことに、村岡一家が移り住んだ住居は、波多野精一の住まいのすぐ近くであった。すなわち、波多野の人格と学殖にすっかり傾倒した村岡は、「牛込の同じ宅地内に師に隣接して僑居を求め、日夜薫陶を仰いでいた」²⁸ というのである。吹田の回想によれば、「その頃は村岡は牛込の薬王寺前の波多野先生の家と同じ地面うちの、おちついた、二階屋の借家に住んだ。家賃はたしか十五円で、二階の書斎には、堂々たる机を置いてあつた。村岡は一生質素な生活をつづけたやうであるが、本とか文房具とか、書斎の道具などには、可なりいいものを置くことを好み、金も惜しまなかつたやうである」²⁹。

このように、波多野と村岡は単に教室だけの師弟関係にとどまらず、実生活においてもきわめて濃密な師弟関係で結ばれていた。後年、村岡が東北帝国大学への就任が内定し、文化史学研究のため、単身ヨーロッパ（独・英・仏）に赴任した期間——大正 11（1922）年 4 月から大正 13（1924）年 3 月まで——、妻と子どもたちは波多野の世話で、彼の自宅に近い京都の洛

北田中大堰町に住んだが、このことも波多野と村岡の特別の師弟関係を物語っている³⁰。それはともあれ、牛込における村岡と波多野の隣人生活が、正確にいつから始まったのかは定かではないが、やがて世にいう「早稲田騒動」によって、二人の人生行路は別々の方向をとることになる。すなわち、同じ早稲田大学の同僚として勤務していた村岡と波多野は、前者が大正6(1917)年9月5日に、後者がその十日余りのちの9月16日に、それぞれに思い出の詰まった学苑を辞職し、その後、波多野は京都帝国大学文学部の宗教学講座の教授に招聘され、同年暮れに京都へと旅立っていった。村岡は東京に残って引き続き一年半の耐乏生活を続けざるを得なかったが、ついには僥倖を得て広島高等師範学校教授として招聘され、その二年後には、さらに仙台の東北帝国大学から招聘されることになるのである³¹。

四 「早稲田騒動」をめぐる村岡と波多野

ところで、波多野と村岡の両者がいわば連座して職を辞す羽目になった「早稲田騒動」とは、一体いかなる事件だったのであろうか。この騒動は「プロテスタント改革運動」とも称されているが、当時早稲田大学の若い講師であった村岡は、このプロテスタントのメンバーの一人であった。村岡は、早稲田大学を辞職した直後に、のちに「早稲田大學改革運動史」と題して公刊された未定の手稿を残している³²。当事者の立場からことの顛末を詳細に記したこの手稿は、没後後遺品整理中に発見され、のちに『早稲田大学史記要』第4巻(1971年6月)、39-52頁に掲載されているが、ここではまず島善高『早稲田大学小史[第2版]』にしたがって、客観的にこの騒動の背景と経緯をおさえておこう。少し長いが全文をそのまま引用することにする。

第二次大隈内閣の出現

創立三十周年祝典の翌大正三(一九一四)年四月、高田学長は諸外国の教育事情を視察するため、また長年の過労を癒すために欧米諸国漫遊の途

に上った。その直後、大隈に大命が降下して第二次大隈内閣が出現した。

長らく政権から遠ざかり、しかも数え七十七歳に達していた大隈に首相の椅子が回ってきたのは、嘗て大隈の幕下にあった犬養毅や尾崎行雄らの憲政擁護運動が功を奏したからであり、その運動には早稲田の学生・校友も多数加わっていた。故に大隈が首相となったことは早稲田大学の名誉・誇りであることは勿論、早稲田の学生・校友には大きな励みとなった。

大隈内閣が成立すると、校友が中心となって大隈伯後援会を全国に組織し、同年十二月の議会解散から翌年三月の総選挙にかけて、各地で大々的に選挙運動を展開した。学生たちも盛んに応援演説を行ない、全国遊説にも立ち上がって、大隈大勝に寄与した。大隈が停車駅ごとに窓から身を乗り出し、車外の人々に雄弁を振るったというのもこの時のことである。

大正四年五月、高田学長が貴族院議員に勅選され、次いで八月には大隈改造内閣の文部大臣に任ぜられた。早稲田大学の総長と学長が総理大臣及び文部大臣の地位についたことによって、早稲田大学の名は天下に轟き、学生・校友も大いに喜んだ。

高田に代わって学苑は第二代学長に天野為之を任じ、高田は名誉学長に、市島は名誉理事に、さらに坪内は名誉教授となって第一線を退いたために、学苑には新旧交代の雰囲気醸成されてきた。

大学改革運動

この頃、早稲田大学には各科教員合同の講師室はあったが、特別の研究室は存在しなかった。しかし次第に教員数が増えるにつれて講師室が手狭になったので、新たに恩賜館研究室を作って、そこに若手の教員を配置した。

恩賜館研究室は二、三人の相部屋で、相部屋どうし親しく大学改革を目指した議論を展開するようになり、次第に恩賜館組＝プロテスタンツと呼ばれる団体を形成した。

大正五年十二月、大隈総長夫人の銅像が早稲田大学校庭に建立されようとしていることを聞き知った彼らは、その非を唱えて天野学長と談判し、銅像は大隈邸の庭園内に建てることとなった。ところが浮田和民が授業で恩賜館組の行動を批判したところから問題は拗れ、彼らは浮田に対して何の処置もとらない天野学長に不信任声明を出し、さらには大学の組織改革、設備改善も求め、高田の学長復帰運動まで展開するに至った。

本来、天野学長は大学改革を標榜しており、大隈家との絶縁を考えていた人物で、恩賜館組と気脈が合いそうであるが、しかし天野は様々の点で不手際が目立ち、恩賜館組はかえって高田名誉学長の改革案に理解を示し、教職員も多数は高田を支持した。

他方、天野学長は早稲田実業学校創立、商科設置の功労者であり、学殖も相当に深かったところから、校友で東洋経済新報社の石橋湛山を始めとして天野を支持する人々もたくさんおり、学生にもそれなりの人気があった。

かくて両者の攻防が展開されるようになり、次第に学外にも騒動が波及し始めた。大正六（一九一七）年六月には「早稲田大学校友会」名で都下の各新聞社に怪文書が配布され、政友会系の『中央新聞』には「早大騒ぐ」「天野学長排斥運動」「高田博士の復活と新学長擁護」の見出しで記事が載るにいたって、早稲田の騒動は早稲田関係代議士、維持員、評議員、校友、教職員、学生を巻き込んだ大騒動に発展した。

騒動の結末

高田名誉学長は学長復帰を固辞し、坪内、浮田、市島らも辞意を表明したので、大隈は天野に辞職勧告を出して事態を収束させようとしたが、天野はこれを拒否した。そこで八月に重鎮会議を開いて、任期満了と共に天野の再任を認めず、当分の間、学長を置かず、総長統裁の下に万端を処理する方針を固めた。

天野派は天野の任期満了の八月三十一日を迎えても盛んに講演会を繰り返し、さらには数日間に亘って大講堂を占拠するなど抵抗を続けた。しかし大隈が早稲田大学を廃校にする決意をしたという噂が伝わって、天野派も占拠を解除した。石橋は鉾を取めた理由を「真に廃校と決定されたとすれば、我々の立場は無い。何となれば、我々は学校を改善しようとして戦っているのに、その我々の運動が、学校をつぶす結果を生んだのでは、理非はとにかく、学生にも、校友にも、世間にも、申し訳が無い」と述べている。

結局、天野は講師及び維持員を辞し、天野派の永井柳太郎ら五教授が解職処分、学生数名が退学処分を受けた。また波多野精一・大山郁夫ら六名の教員が辞職を申し出、学生数名も自主退学をして騒動の結末がついた。

この大騒動の背後には、大隈の勢力が政界に伸張するのを快く思わない

者たちの暗躍があったとも伝えられているけれども、真偽の程は定かではない。

なお早稲田騒動に学生の立場で加わったのが尾崎士郎であった。彼は騒動後に自主退学し、石橋湛山の東洋経済新報社に引き取られた。彼の小説『人生劇場』は、この騒動を題材としたものである³³。

以上が、「早稲田騒動」のおおよその顛末であるが、かかる騒動のなかで村岡ならびに波多野が、どのような心情からいかなる仕方で行動したかは、村岡が遺した手稿「早稲田大學改革運動史」から窺うことができる。村岡はこの手稿の末尾のあたりに、以下のように記している。

七月十五日には、吾人は、波多野精一氏をとうて、吾人が従來の運動の運動の精神と経過とを語り。學校の改善てふ點に於いて又吾人と同意見なる氏は、吾人の勞を諒としたり。同日午前、氏は高田氏に招かれて學校當面の問題に關する説明をきけり。かくて天野氏を留任せしむとするが如きは、學校を黨派的政治に委するものにして、學問上、教育上ゆゑしき大事なりしと、七月十六日早朝、坪内、市島二氏を訪問し、七月十七日には浮田、高田二氏を訪問して、その意見を述べたり。波多野氏の行動は、もとより學校を憂慮する氏自らの誠意よりいでものなりといへども、吾人の行動に對して多大の援助たりしことは言ふをまたず。

吾人が、己が母校をして眞個名實相協へる最高學府たらしめむとの理想よりして事を興し、高田氏の再起取消に一頓挫を來してより、意想外の曲折と紛擾とを來して今日に至れることは、抑も個人の責任にありやは、殊に事未だ進行の中途にある今日に於いて之を論ずるを欲せずといへども、吾人は、今は學校の運命一に維持員諸氏の手の中にあるを思ひ、維持員歴訪を以て吾人がなすべき途しばらく盡きたりとして、暫らく事の成行を看視せむと欲す。もしなほ吾人の希望にして達せられず、學校の將來を思ひて企てし吾人が運動が、はからずもかく

の如き結果を來して、學校を野心家一派の黨派的政治に委ぬるが如きことゝならむには、吾人はもとより籍を母校におくべくもあらず、一は吾人の責任感より、一は學校に對する絶望より、吾人のとるべき態度はもとより決せり³⁴。

かくして、プロテスタンツ改革運動の首謀者の一人であった村岡は、9月5日に早稲田を辞職し、波多野もみずからの学問的信条に従って、9月16日に退職願を提出して、十七年間奉職した早稲田大学に別れを告げた。この事件を客観的に評価するためには、なお多角的な検証が必要であろうと思うが、少なくともプロテスタンツの諸氏、とりわけ村岡にとっては、それは「母校をして眞個名實相協へる最高學府たらしめむとの理想」より発した、醇乎たる改革運動にほかならなかつた。波多野はこの運動には直接関わってはいなかつたものの、村岡の手稿が証言しているように、精神的には村岡らの活動に共感し、独自の信念からこれを支持する行動を取つたのであつた。波多野が世間を騒がしたこの事件をどのように見ていたかは、仙台にいる若き田邊元に宛てた二通の書簡から、よりつまびらかに窺い知ることができる。まず8月3日付けの書簡では、波多野は「早稲田大學の粉擾新聞紙にて御讀みの事と存じ候 新聞紙には虚報も傳ふるもの多く所謂天野派と申す輩によつて買収され居るらしきもの少からず候 要は天野といふ人が學校の目的も將來も眼中になく凡てを犠牲にして學長の位置を得むとする陰謀よりも生じたる騒動にて、實ににが〜しき至りに候」³⁵、と述べているが、辞職した翌日の9月17日には、より詳しく次のように書き記している。

拜啓 御手紙ありがたく存候、小生病氣はもはや全快致候間憚ながら御休神下され度候

早大の騒動につきて御心配に預りかたじけなく存じ候 昨年末以來極めて複雑なる内容を有し幾多の波瀾曲折を経たる歴史にてなか〜傍觀者には御了解困難かと存じ候 とに角早大は其從來の態度方針の必

然的結果としてこゝに立至りたるにて、今や精神的に全く死滅し残るは虚偽の塊あるのみに候 精神を新にして復活するに非ずば存在の意義なく否其の存在は却つて罪惡に候 小生は衣食の爲めこゝに留る事が小生にとりては精神的自殺を意味するを悟り熟慮の後昨日辭表を提出し全く浪人の身と相成り候 小生は凡ての輕舉妄動をつゝしみしも昨年來少壯教授の運動には多大の興味と同情とを寄せ其のうち特に少數の一派、「大學の本質は眞理の研究に存す」といふ主義のもとに活動したる一派（或は解職處分を受け或は解職して今や一人も學校に留らず相成り候）と意氣相投合して、個人として種々盡力する所有之候 小生の辭職は小生の其態度の歸結といふ意味も有之候 要するに小生等が微力を以て代表したる philosophical spirit は早大に於て外的には全く敗北ししかも此度の大騒擾によつて内的の勝利を示したるものに候

先は右御返事迄

草々³⁶

ここには波多野の「侍」的な一面がよく示されているが、同時に、村岡にとっても波多野にとっても、「早稻田騒動」と呼ばれた出来事が、いかなる意味で問題であったのかがよくわかる。すなわち、両者にとっては「大學の本質は眞理の研究に存す」という醇乎たる精神が問題だったのであり、またそれに基づく改革運動が問われていたのである。換言すれば、波多野が“philosophical spirit”と言い表している「学問的精神」が、そこで問題となっていたのである。

五 波多野精一の学的態度

波多野はことあるごとに「學問の理想に對する謙遜の態度」³⁷、あるいは「嚴肅な敬虔な態度」³⁸を説いたが、同時に彼自身がそれを体現し実践していたことは、門弟たちが異口同音に証言するところである。波多野は自分

自身について多くを語らなかった人であり、したがって自分の学問方法についても明確に述べたものはない。そこでわれわれは彼の弟子たちや関係者の証言を通して、波多野の「学的態度」なるものを考察してみたい。まず愛弟子の松村克己の回想に耳を傾けてみよう。

本格的な学問の道というのは、地道に忍耐深く探求の歩みを一步一步踏み固めてゆく、ということである。オリジナルなテキストに当たって考えることを先生はいつも奨められた。訳本、しかも不正確なムード的な翻訳の多い現今、先生はやはり訳本を用いることを喜ばれるまいと思われる。ましてダイジェストを嫌われた。不正確な知識はない方がよい。知識は正確でなくてはならぬし、知らぬことは知らぬと云えるのが学問の徒の生き方だと教えられた。一流と亜流との区別、本物といい加減なものとの弁別は先生において厳しかった。いい加減なものとの接触を努めて避け、本質的なものとの関わりを大切にするのは、生涯の変わらぬ生き方であった。雑文を書くことと講演の依頼を断るという方針も生涯にわたって貫かれた。学問の道におけるメトードは生活のそれと表裏一体をなし、私たちはそれを「波多野流」と呼んでいた。(中略)

卒業して大学院に進むべく研究題目を提出して許可されたとき、先生が指導教授の一人であった。恐る恐るお宅にご挨拶(?)に参上して、勉強の仕方や注意を乞うたところ、返って来たお答えは次のようであった。人それぞれに流儀というものがあるから、それでやる他はない。他人の真似をしても駄目だ。私のやり方が君に向くかどうかわからない。やりたいことを自分の思う通りにやればよい。その中から自然に道は開けてくる。次々に、ね、と。私はびっくりした。自分の流儀を持たぬ人間、生き方を身につけていないと、学問もできないのだということを、どやしつけられたような気がした。またやりたいことは何か。思う通りにというが、今何をどう思っているのか。自然に、と云われるが、自然に道が開けてくるまでにはどれだけの苦勞がいる

のか。私はおぼろげながら、学問するということはどういうことなのか、を教えられた気がした。漠然とした問いを持って行っても先生は答えない。却って逆に質問されて詰まって引き下がる他はない。だが具体的にはっきりした質問にはいつも敵確な答えが与えられ、更には追いかけて長い速達の手紙を頂くことがしばしばであった。genau und richtig sachlich und gründlich（きちんと正確に、事柄を大切に、徹底的に）というのは先生の学問と生活における一貫した態度であった。これはドイツ魂だ。ケーベル先生の影響、ドイツ留学の経験から身についたものであろう。然りと否とをはっきりし、できることとできないことを自らに問い、好悪を偽らずに見定めて、はっきりわからないことは知らぬと云い切る勇氣を持っていた。（中略）学問によって鍛えられた生涯は、晩年に至るに従って完璧とも云うべき豊かな人間性の域に達せられた。それは人に「永遠」を垣間見させるものであり、知性とか叡知とかいう語の具現に接する思いを抱かせた³⁹。

松村がここで紹介している、「genau und richtig sachlich und gründlich（きちんと正確に、事柄を大切に、徹底的に）」という態度は、十九世紀のドイツで確立された《フィロロギー》(Philologie)の立場であって、村岡が共有しているのもまさにこのフィロロギーの精神である⁴⁰。そもそも「フィロロギー」(φιλολογία; philologia)の原義は、logosのloveであり、これは村岡が傾倒したアウグスト・ベーク(August Boeckh, 1785-1867)が述べているように、ある意味では「哲学」(φιλοσοφία; philosophia)とほぼ同義である⁴¹。波多野が、村岡は「純真な philosophia (愛智, 眞理の熱愛)にもえてゐた」と語るとき、そこにこのフィロロギーの精神が、同時に、フィロソフィアの精神、すなわち波多野のいう“philosophical spirit”と通底するものであることが示されている。波多野は村岡に宛てた大正15(1926)年6月24日の書簡に、「Philologeの大切な二つの任務」として、「Quellenの研究と歴史的叙述」を挙げた上で、「私は當大學の學生などに接したところでは、どうも日本人にPhilologeの心持の乏しいのを感じずに

みられません。哲學をほんとにやるには哲學の Klassiker を學ばねばならず、それにはもつとほんとの Philologe の態度をもつことが必要と信じます⁴²、と記している。波多野の退官後、しばらくのときを経て京都大学文学部基督教学講座の教授に就任した有賀鐵太郎は、「あくまでも學的冷静さを持して自由に基督教を研究し批判する」態度こそが、波多野がわれわれに対して模範的に示した「學的態度」であって、それを「繼承して基督教學の健全な発展の為に盡」すことが、「基督教學に従事する者の第一の心がけでなければならない⁴³、と述べているが、自由かつ冷静なる学問的研究ならびに批判ということは、きっちりとした文献学的手続きを抜きにしてはあり得ない。その意味で、近代のリベラルな文化科学の発展は、文献学の精神に深く裏打ちされている。

それはともあれ、波多野の下で助教授を務めたこともある、西田幾多郎の愛弟子の西谷啓治は、波多野の学風について、次のような興味深いエピソードを紹介している。

先生の學風といへば、今でも思ひ出す一つの小景がある。やはり私の卒業前後のことと思ふが、その當時、毎月行はれてゐた哲學茶話會の席でのことである。その時分は學生の數も少なかつたためか、哲學の茶話會に波多野先生や哲學史の朝永三十郎先生など時々出て来られた。倫理の藤井健治郎先生が顔を出されることもあつた。或る時、西田先生と波多野先生とが向ひ合つて座られ、何かの話の繼ぎに西田先生が、「波多野君、どうもヴィンデルバントの Lehrbuch なども餘り感心しないね」と言はれた。すると先生は「いや、あれは立派なもんだ。寧ろくろくと向きの哲學史だ」といふ意味の答をされた。その「くろくと向き」といふ言葉が妙に私の記憶に残つてゐる。西田先生の批評には西田先生の見識が現はれてゐるが、波多野先生の評價にはまた波多野先生の學風が現はれてゐると思ふ⁴⁴。

西谷がいう波多野の学風は、只管打坐に裏打ちされた西田幾多郎のそれ

とは、いわば対極をなすものであるが、それはまた西田とは違った仕方で、「ひたすら學究として自己を刻み上げて行き、そのためにはそれ以外のものへの興味を一切斷つことをも辭さないといふ……強い態度」⁴⁵でもあった。かかる学的態度は、あの偉大な西谷啓治ですら「ついてゆく自信がもてなかつた」ものであり、かくして西田＝田邊と引き継がれた京都哲学の伝統の中にあつて、波多野はひたすら孤高な存在にとどまらざるを得なかつた。ドイツのフィロロギーの精神に涵養され、かつ自己に徹底的に嚴格であつた波多野の学的態度には、他を寄せ付けない峻厳さがあり、そこに波多野の名を冠した学派が成立しなかつた由縁もあろう。しかし波多野の講筵に列した学生たちの中に、彼の凜とした学的態度を例外的に繼承した者がいる。それが彼の最初期の学生の村岡典嗣である。なるほど、石原謙も波多野の衣鉢を継ぐ愛弟子である友人であつたが、彼は波多野との出会いがなくとも、あのように立派な業績を挙げることはできたであろう⁴⁶。しかし村岡の場合には、おそらく波多野と巡り逢っていなければ、あのような後世に残る日本思想史の仕事はなし得なかつたであろう。したがって、嚮応する学問的精神という点では、石原よりも村岡との関係の方がわれわれの興味をそそるのである。

六 村岡典嗣の学的態度

それでは、村岡はいかなる学的態度を身につけ、いかなる学風を培つたのであろうか。これに関しては、村岡の死後、かつての友人門下によって結成された「村岡典嗣著作集刊行會」が、著作集を刊行するに当たって巻頭に据えた、次のような言葉が端的に事態を物語っている。

日本思想史という學問は、今や學界に確たる地歩を占め、その研究に携わる學者もまた少くない。しかし、この學問の揺籃期ともいふべき大正時代から、一科の近代的學問としてこれを體系的に組織しようとし、その基礎づけに専心努力した最も有力な學者として、故村岡典

嗣教授の名を忘れることは出来ない。(中略)

思うに明治以来、日本の精神文化の研究に専念した學者は必しも少くない。しかしその中であつて、村岡教授は近代的な實證精神と犀利な哲學的思索力とをもつて、日本思想史という新しい學問の確立に重要な布石と道標とを遺したのであつた。このことは近代學問史上における教授の最も大きな功績というべきである。その確實精到な具體的研究と透徹せる理論的基礎の設定とは、ともに高く評價されるべきことであるが、就中わが國精神文化の研究における偏向、偏見を排除し、眞の學問的精神を導入したことは特筆されねばならない。(中略)

生前、教授はこと學術に關しては頗る嚴格な態度を持し、論説の公表の如きは最も慎重をきわめ、決してこれをかりそめにすることがなかつた。……⁴⁷

ここに示されているように、「眞の學問的精神」、ならびに「こと學術に關しては頗る嚴格な態度」ということが、村岡を特徴づける最も根本的な性格であつたと言えるであろう。事実、幼少期からの村岡を熟知している佐佐木信綱も、村岡のことを「學問のために身をささげた努力家」と称し、彼を「學者的良心の極めて旺盛な君」⁴⁸、と呼んでいる。中学時代以来の親友の吹田順助も、異口同音に、故人のことを次のように評している。

しかし君が日本思想史、神道史の研究において取つたところの、文獻學的・批判的立場は、當時その方面においてさかんに行はれた、謂はゆる神憑りの論斷との鮮やかなる對照において、最も學的・良心的なものであり、當時にあつては劃期的とも稱しうべく、今後といへどもかくの如き意味において永く尊重されねばならないであらう。(中略)

君は中學の初年級時代からの私の友人であり、眞の意味の舊友であつた。君はその頃から頭腦明敏、操守する所が高かつた。已に少年時代から親戚に當る佐佐木信綱博士に師事し、歌文を能くし、日本古典

の知識においても儕輩を挺んでてゐた。君の日本思想史研究において示された古典的造詣は、已にその頃に基礎づけられたといへよう。君は後に早稲田大學に入り、波多野精一博士の門に西洋哲學を學んだが、大學卒業後數年にして發表せる名著『本居宣長』によつて識者の注意を呼び、旁々、波多野博士の徳憑もあつて、日本思想史の研究に向ふやうになつた。君が未だ學窓にあつた頃、家運漸く傾き、學業の繼續にも支障を來たしたやうであるが、君は凡ゆる艱難と戦つて、拮据精勵、終に斯學における一家を成すに至つた。君は學的良心を持する點において極めて峻烈であり、名を成すに至つても、一切の雜文書き、放送を謝絶したくらゐである⁴⁹。

以上に見出された、「眞の學問的精神」、「こと學術に関しては頗る嚴格な態度」、「學者的良心の極めて旺盛な君」、「文獻學的・批判的立場は……最も學的・良心的なもの」、「學的良心を持する點において極めて峻烈」という特質は、まさに村岡が波多野から繼承した、あるいは波多野と共有した精神的遺産である、といつても過言ではなからう。村岡哲が、自分の父について、「しかし、學問そのことにおいて永遠の生に關與せんとし、常に百年後の讀者を求めてゐた父」⁵⁰と述べているのも、學者としての村岡典嗣の本質をよく言い当てている。名著『本居宣長』が誕生した年に生まれたこのランケ學者は、「本居宣長は學者である」⁵¹という書き出しの言葉の中に、「正大にして純粹な學問的精神を體現した日本の眞の學者宣長に対する傾倒の念」⁵²を鋭く感得しているが、それに関連して次のようにも述べている。

こうして典嗣はまず初めに本居宣長の研究に入ったが、翁の純正な學問的態度に強く心を打たれた。とくに『玉勝間』の有名な「師の説になづまざる事」や、「わがをしへ子にいましめおくやう」の項の中には、波多野教授が不斷に愛誦しかつ説いた「プラトンを愛す、されど眞理はなほいとし」（amicus Plato, sed magis amica veritas）と全

く同一の精神を見出し、いよいよ深くその中に沈潜して行った。そうして、学問論そのものはもとより哲学の任務であり、学徒はそれぞれ専門の研究に従うべきものとしながらも、この哲学的精神は不可欠となし、自らの研究につき不断の反省を加えたのであった。右のようなわけで、典嗣にはいわゆる学問論を公けに論じたものはないが、のちに大学の講義の際などには折に触れて説いていたもののようで、それとおぼしいメモのたぐいは遺されている。すなわち、学問は全人格に根ざす道であり、職業のための術、論理の遊戯、一時の方便・手段ではなく、それ自らに目的を有する普遍の道である。従って学徒は何よりもまず道徳的人格者でなければならず、とくに学徒としての至要な徳目としては、虚偽・速成を排する誠実、不公平・僻見を排する公正、慢気・偏執を排する謙虚の三つがあげられている。これらに徹して初めて、学的態度は真理に対する敬虔さにおいて純真なるを得る、と。そうして、このような学問的精神をすこぶる明快にあらわしているものとして、宣長の子春庭に学んだ国学者で伊勢の祠管足代弘訓(安政三年〔一八五六〕没)の有名な自警七条をあげ、もって自戒としたのであった。

- 一、人をあざむくために学問すべからざること
- 一、人と争うために学問すべからざること
- 一、人をそしるために学問すべからざること
- 一、人の邪魔をするために学問すべからざること
- 一、己が自慢するために学問すべからざること
- 一、名を得るために学問すまじきこと
- 一、利を貪るために学問すまじきこと⁵³

同氏によれば、昭和10年に東京帝国大学文学部倫理学講座の後任の話が、恩師の波多野精一を介してもたらされたときも、村岡は熟慮の末にこれを固辞したというが、その理由は、「日本思想史という自分ではじめた講座を捨てて他の講座を担当するというのが、どうしても学者としての良

心を納得させ得なかった」⁵⁴ からだという。このように、村岡は「名を得るために学問すまじきこと」の箇条を自ら遵守したのであった。

おわりに

以上、われわれは両者の出会いと接点に光を当てつつ、波多野精一と村岡典嗣の生涯の軌跡を追跡してきたが、波多野が逝ってからはや五十七年、村岡が旅立ってからはすでに六十一年経っている。それゆえ、波多野も村岡も現在の大方の日本人にとっては、もはや忘却の彼方に追いやられているかもしれない。しかし明治生まれの両者が、大正・昭和という激動の時代に、それぞれ宗教哲学と日本思想史という分野で、比類なき厳肅さをもって、真摯かつ良心的に学問研究に励んだという事実は、それに照らしてわれわれ自身の現在の姿を映し出すべき鏡として、われわれの前に存在し続けている。この半世紀間以上の期間に、あらゆる学問分野において大きな進歩がなされ、個別の理論や解釈において波多野や村岡の業績で古びているものも少なからずあるであろう。しかし彼らが対象に取り組んだ際の学的態度や、それを解明するために払った学問的労苦は、いまでもわれわれが容易に真似ることも、越えることもできないものとしてあり続けている。軽佻浮薄な議論が横行する現代にあって、われわれは学問に身をささげた戦前の日本人の生き方から、いまいちど学び直す必要があるのではあるまいか。

(2008.1.18)

註

- ¹ 「昭和21年4月25日付けの香川鐵藏宛の書簡」、『波多野精一全集』第6巻、370-371頁。
- ² 「昭和21年5月2日付けの田中美知太郎宛の書簡」、『波多野精一全集』第6巻、389-390頁。
- ³ 村岡典嗣の人と思想については、管見によれば、新保祐司『日本思想史骨』（構想社、1994年）に収められている論攷「村岡典嗣——学問の永遠の相の下

に」が卓越した知見を提供している。筆者はそこから多くの示唆を与えられたが、本稿自体は歴史研究を意図しており、新保のような文芸評論とは種類を異にしている。

- 4 波多野精一の生涯と業績に関しては、石原謙・田中美知太郎・片山正直・松村克己『宗教と哲学の根本にあるもの』(岩波書店, 1954年)の冒頭を飾る、石原謙「序説 生涯と学業」(1-36頁)に詳細に記述されているが、ここでは巻末に収録されている「波多野精一年表」に従って、その概略だけを述べることにする。村岡典嗣の生涯と業績に関しては、原田隆吉「村岡典嗣」、永原慶二・鹿野政直編『日本の歴史家』(日本評論社, 1976年), 248-253頁所収、ならびに玉懸博之「村岡典嗣(一八八四-一九四六)」, 今谷明他編『20世紀の歴史家たち(2) 日本編 下』(刀水書房, 1999年), 163-178頁所収が、全体の概要をコンパクトに記している。但し、ここでは村岡典嗣著、前田 勉編『新編 日本思想史研究——村岡典嗣論文集——』(平凡社, 2004年) 444-449頁所収の、池上隆史氏作成の「村岡典嗣年譜」に従って概略を述べることにする。
- 5 佐佐木弘綱は村岡典嗣の遠縁にあたる。弘綱の子息の佐佐木信綱の説明によれば、両者の関係は以下の通りである。「君の父君は、丹波山家の藩士の家に生れ、心の正しい人、母君は武蔵忍の藩士佐藤氏の女で、心のやさしい人であつた。しかして佐藤氏の夫人は、予の母の姉であるので、君の叔父なる佐藤宗次君と予とは特に親しく、従つて予は、村岡君をその幼時から知つてをつた。君が一時、予の小川町の家寄宿してをつたのは、さうした縁故のためである。」佐佐木信綱「序」、村岡典嗣『日本思想史研究 第三』(岩波書店, 昭和23年), 1頁。
- 6 村岡が在外研究のためにヨーロッパに赴いたのとほぼ同じ時期に、三木清、九鬼周造、天野貞祐、吹田順助、小牧健夫、成瀬無極、実吉捷郎、伊藤吉之助、小山軀絵、斎藤茂吉、阿部次郎、小宮豊隆、羽仁五郎、石原謙など、錚々たる顔触れがヨーロッパ留学を果たしている。この時期は、第一次世界大戦集結後の史上空前のインフレの頃で、日本からの留学生は随分裕福な生活ができたようである。例えば、九鬼がハイデルベルクで教授のリッカートから、三木がマールブルクで私講師のレーヴィットとガダマーから、私宅講義を受けていたことはよく知られているが(三木清「讀書遍歴」『三木清全集』第一卷〔岩波書店〕, 420-421頁参照)、こうしたことはこの空前絶後のドイツのインフレを背景にはじめて理解できる。はたして村岡はどのような留学時代を過ごしたのかは、筆者には必ずしもよくわからない。しかし吹田順助の

『旅人の夜の歌 — 自伝 —』（講談社，昭和34年）には，当時のドイツの状況と日本人留学生の動向がよく描き出されている（同書119-187頁参照）。空前絶後のインフレのこの時期，強い日本の通貨を背景にして，大量のドイツの學術書がわが国に買い取られたが，村岡も阿部や小宮などと諮って，東北帝国大学法文学部のための選書と図書購入に尽力した。高橋章則「村岡典嗣の『文献学』と聚書」、『季刊 日本思想史』第63号（2003年），95-97頁参照。

- 7 サバティエ，波多野精一・村岡典嗣訳『宗教哲學概論』（内田老鶴圃，明治40（1907）年）。本書は Auguste Sabatier, *Esquisse d'une philosophie de la religion d'après la psychologie et l'histoire* (Paris: Fischbacher, 1897) の英訳書 *Outlines of a Philosophy based on Psychology and History* (London: Hodder & Stoughton, 1897) からの重訳である。
- 8 サバティエ，波多野精一・村岡典嗣訳『宗教哲學概論』（内田老鶴圃，明治40年），「序」。「波多野精一全集」第5巻，445-446頁に再録。
- 9 吹田順助「村岡典嗣君を憶ふ — 覚え書き風に —」『民間伝承』改題『学芸手帖』第2号（1957年6月），22-31頁。引用箇所は29頁。
- 10 「普及福音教会」に関する比較的詳しい解説としては，鈴木範久『明治宗教思潮の研究』（東京大学出版会，1979年）第一章第一節「普及福音教会」（25-43頁）が参考になる。Cf. Charles H. Germany, *Protestant Theologies in Modern Japan* (Tokyo: IISR Press, 1965), pp. 9-10.
- 11 鈴木範久によれば，普及福音教会が設立した新教神学校の「最初の学生は，独逸学協会学校で学んでいた三並良と向軍治の二人であった。初期にはスピナーやシュミーデルの自宅で授業がなされたが，同年一〇月三日本郷区壱岐坂教会会堂が落成することによって，同会堂でも行われ，さらに一九九一年（明治二四）には小石川区上富坂町三九番地に校舎が新築をみた」という。鈴木範久『明治宗教思潮の研究』，29頁。
- 12 H. E. ハーマー編，岩波哲男・岡本不二夫訳『明治キリスト教の一断面 — 宣教師シュピンナーの『滞在日記』 —』（教文館，1998年），358-361頁所収。
- 13 言うまでもなく，トレルチは十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのドイツ・プロテスタント神学を代表する神学者で，その神学的傾向から「宗教史学派の組織神学者」と名づけられもしたが，彼のリベラルで啓かれた思想は，「普及福音教会」の母体である Der allgemeine evangelisch-protestantische Missionsverein にも，やがて少なからぬ影響を及ぼすことになった。それだけでなく，波多野も村岡もドイツに留学した際に，ともにトレルチの講義を

聴講しているのです、ここでトレルチを引き合いに出すことは、まんざら筋違いなことでもなかろう。

¹⁴ ここに記した情報は、*Troeltsch-Studien. Untersuchungen zur Biographie und Werkgeschichte*, herausgegeben von Horst Renz and Friedrich Wilhelm Graf (Gütersloh: Gerd Mohn, 1982), S. 49-52 によっている。

¹⁵ Ibid., S. 49.

¹⁶ 石原謙の論文「明治・大正期におけるキリスト教学の歴史について」には、この神学校に関する以下のような興味深い言及が見出される。

「シュミーデルが二一年に来ましてから、この教派〔Allgemeine evangelische Kirche と称していた普及福音教会〕は特に神学校を設けて新教神学と称し、最初は本郷に設けられ、後にそのそばに教会ができましたので小石川の現在の上富坂の土地に移ったのであります。これは他の教派と違いまして、ドイツ語を用い、ドイツのキリスト教を紹介し、殊に神学の研究に比較的に熱心でありましたため、学生たちに対しては相当の刺激を与えたようであります。それによって神学に対する関心が若い人たちの間に可成り著しく高まってきた。」

石原謙「明治・大正期におけるキリスト教学の歴史について」『石原謙著作集』第10巻（岩波書店、1979年）、390-403頁所収。ここに引用した箇所は393-394頁。

¹⁷ 吹田順助「村岡典嗣君を憶ふ——覚え書き風に——」、29頁。

¹⁸ 池上隆史「村岡典嗣年譜」。

¹⁹ オストワルト博士というのは、おそらくマーカス・オストヴァルト (Marcus Ostwald) のことではないかと思うが、この人物に関しては、生没や経歴を含めて、現段階では筆者には詳しいことはわかっていない。

²⁰ 昭和3 (1928) 年1月15日に記された「増訂にあたりて」の一部。村岡典嗣『本居宣長1』(岩波書店、1928年)、1頁。

²¹ 『本居宣長全集』月報。村岡 哲『史想・随筆・回想』(太陽出版、1988年) 234頁に引用。

²² 原著は、Wilhelm Windelband, *Die Geschichte der neueren Philosophie in ihrem Zusammenhange mit der allgemeinen Cultur und den besonderen Wissenschaften*, 2 Bde (Leipzig: Druck und Verlag von Breitkopf und Härtel, 1878-1880) である。ヴィンデルバントの二巻本の原著は、第一巻が七章立てで総頁580頁、第二巻が二部立て総頁400頁の大著である。このうち村岡によって訳されたのは、第一巻第四章の終わりまでであり、これは分量

的には全体の約四分の一にあたる。当初の計画では、少なくとも第一巻の後半部分は翻訳されるはずだったと思われるが、これはついに未刊に終わった。これが完結に至らなかった理由は定かではないが、おそらく第一次大戦の勃発や村岡自身の身辺の慌ただしさのせいであろうと推測される。

- ²³ ヴィルヘルム・ヴィンデルバント，村岡典嗣訳『近世哲学史 第壹 近世初期の部』（内田老鶴圃，1914年）。この訳書は，約四〇年後に子息の村岡哲氏によって改訳され，共訳のかたちをとって角川文庫の一冊として出版されている。ヴィンデルバント，村岡典嗣・村岡哲訳『近世哲学史 上巻』（角川書店，1953年）参照。
- ²⁴ これについては，宮本和吉・高橋穰・上野直昭・小熊虎之助編集『増訂版 岩波哲学辞典』（大正11年，昭和2年増訂版第五刷）を参照されたい。この辞典に村岡が執筆した項目は，以下の通りである。「あかき心——きたなき心」「アナクサゴラス」「天神」「天照大御神」「天地初發之時」「天之御中主神ミ」「天譲日天狭霧國禪月國狭霧尊」「新井白石」「顕露事——幽事」「現人神」「荒神」「顕，成，失」「伊邪那岐神，伊邪那美神」「伊勢貞丈」「出雲大社」「井上正鐵」「忌部正通」「宇氣比」「保食神」「氏神」「産須那神」「占」「エレア學派」「大國隆正」「大國主神」「大嘗」「思兼神」「大山為起」「神樂」「隱身」「荷田春滿」「神(三)(神道)」「神産巢日神」「賀茂眞淵」「神明憑」「惟神」「巫女」「神嘗祭」「神主」「北畠親房」「靈異」「國之常立神」「栗田寛」「黒住宗忠」「祈祷」「古學神道」「古神道」「別天神」「事代主神」「障神」「猿田毘古神」「慈遍」「儒家神道」「心學」「神祇史」「神祇四姓」「神國」「神代系図」「神典」「神道」「神道史」「神道十三派」「垂加神道」「鈴木雅之」「俗神道」「高天原」「高御産巢日神」「託宣」「建速須佐之男命」「建御雷之男神，建布都神」「建御名方神」「橘守部」「谷川土清」「鎮魂祭」「鎮守」「月讀命」「罪，二(神道)」「出口延佳」「常世國」「外山正一」「豊宇氣神」「中村正直」「西村茂樹」「伯家神道」「服部中庸」「伴信友」「鎮火祭」「ピタゴラス及びピタゴラス學徒」「火之神」「神籬」「平田篤胤」「平田派神道」「福沢諭吉」「富士谷御杖」「ヘラクレイトス」「法華神道」「本地垂迹」「禍事・吉事・直び」「禁厭」「皇祖天神」「三種神寶」「禊祓」「魂」「御年神」「産靈」「六人部是香」「本居宣長」「物，(二)[神道]」「社」「倭姫命」「唯一神道」「吉川惟足」「吉田兼俱」「吉見幸和」「夜見國」「両部習合神道」「度會神道」「和論語」。
- ²⁵ 石田一良の手になる英文の解説資料が，これについての情報源である。Cf. Ichiro Ishida, “Muraoka Tsunetsugu: The Man and his Work,” in Tsunetsugu Muraoka, *Studies in Shinto Thought*, trans. Delmer M Brown &

- James T. Araki (Tokyo: Japanese National Commission for UNESCO, 1964), p. iv.
- 26 村岡 哲『史想・随筆・回想』, 234頁。255頁も参照のこと。
- 27 村岡 哲『続 史想・随筆・回想』(太陽出版, 1998年), 316-317頁。
- 28 村岡 哲『史想・随筆・回想』, 283頁。
- 29 吹田順助「村岡典嗣君を憶ふ——覚え書き風に——」, 30頁。
- 30 村岡 哲『続 史想・随筆・回想』, 319頁参照。
- 31 東北帝国大学着任以後, 昭和9(1934)年の日本思想史学会成立までの村岡の年譜については, 池上隆史「村岡典嗣年譜——東北帝國大學文化史學第一講座着任から日本思想史學會成立まで(上)」『年報 日本思想史』第2号, 14-24頁, ならびに「村岡典嗣年譜——東北帝國大學文化史學第一講座着任から日本思想史學會成立まで(下)」『年報 日本思想史』第3号, 11-21頁が詳しい。
- 32 村岡典嗣「早稲田大学改革史」。これは没後後遺品整理中に発見された未定の手稿で, 内容からみてその執筆は早大辞職(大正6〔1917〕年9月5日)直後と推定される。のちに『早稲田大学史記要』第4巻(1971年6月), 39-52頁に掲載されている。
- 33 島 善高『早稲田大学小史〔第2版〕』(早稲田大学出版部, 2005年), 90-93頁。
- 34 村岡典嗣「早稲田大学改革史」『早稲田大学史記要』第4巻(1971年6月), 49-50頁。
- 35 「大正6年8月3日付けの田邊元宛の書簡」, 『波多野精一全集』第6巻, 13頁。
- 36 「大正6年9月17日付けの田邊元宛の書簡」, 『波多野精一全集』第6巻, 14-15頁。
- 37 「大正15年2月17日付けの石原謙宛の書簡」, 『波多野精一全集』第6巻, 190頁。
- 38 「昭和5年1月5日付けの石原謙宛の書簡」, 『波多野精一全集』第6巻, 208頁。
- 39 松村克己「波多野精一の哲学」『京都大学学生新聞』第11号(昭和49年11月27日), 第2面。
- 40 フィロロギーについての村岡の基本的見解は, たとえば, 村岡典嗣『日本思想史概説』(創文社, 1961年), 10-29頁にコンパクトに記されている。
- 41 Cf. August Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck; zweite Auflage

besorgt von Rudolf Klussmann (Leipzig: Druck und Verlag von B.G. Teubner, 1886), S. 16-25.

- 42 「大正 15 年 6 月 24 日付けの村岡典嗣宛の書簡」、『波多野精一全集』第 6 巻，82-83 頁。
- 43 有賀鐵太郎「ヘブライ思想における神と智慧」『哲學研究』第 406 号（波多野精一博士追悼號）（昭和 27 年 3 月 20 日），32 頁。
- 44 西谷啓治「波多野先生のことども」『哲學研究』第 406 号（波多野精一博士追悼號）（昭和 27 年 3 月 20 日），55 頁。
- 45 同上。
- 46 石原謙は明治 15 (1882) 年生まれなので，波多野精一より 5 歳年少であるが，彼にとって波多野は，「学問上の恩師」である前にまず「一人の先輩」であり，両者の出会いも波多野のドイツ留学からの帰国後一年経ってから始まっている。彼は波多野夫妻の紹介でのちの夫人とも識り合い，その後生涯にわたって「学問的な指導を受け」たので，村岡とは違った意味で，波多野と特別な師弟・友人関係にあった。しかし石原は，波多野と出会う以前にすでに自己の学問の基礎を固めていたので，純粋な意味での師弟の間柄というよりは，むしろケーベル門下の兄弟弟子といったほうが正確であろう。
- なお，石原は大正 13 (1924) 年 7 月から昭和 15 (1940) 年 9 月まで，東北帝国大学教授を務めたので，村岡とは同じ大学の同じ学部の同僚として約十五年間過ごしたことになる。しかし両者の関係についてはあまり知られていない。同じく波多野精一を師と仰ぎながらも，石原も村岡もお互いについてほとんど語っていない。『石原謙著作集』第十一巻（岩波書店，1979 年）所収の「学究生活五十年」（3-115 頁）参照。
- 47 村岡典嗣著作集刊行會，「序」，村岡典嗣『神道史（日本思想史研究 I）』（創文社，昭和 31 年），1-2 頁。
- 48 佐佐木信綱「序」，村岡典嗣『日本思想史研究 第三』（岩波書店，昭和 23 年），1 頁。
- 49 吹田順助「はしがき」，村岡典嗣『日本思想史研究 第四』（岩波書店，昭和 24 年），1-2 頁。なお。吹田は自叙伝においては，畏友村岡の死に関して次のように記している。「昭和二一・四・一三——村岡典嗣，仙台の自宅にて逝く。開成中学二年級以来の親友，私のいちばんの旧友である。今にして往時の友好を思い出し，真箇の学者らしい君の業績の跡を考えると，人生落莫の感に堪えないものがある……。」吹田順助『旅人の夜の歌——自伝——』，255 頁。

- ⁵⁰ 村岡哲「あとがき」、村岡典嗣『日本思想史研究 第三』(岩波書店, 昭和23年), 304頁。村岡哲によれば、「実はこれも、父が生前口癖のようにしていた言葉であった」(村岡 哲『史想・随筆・回想』, 254頁)という。
- ⁵¹ 村岡典嗣著, 前田勉校訂『増補 本居宣長1』, 18頁。
- ⁵² 村岡 哲『史想・随筆・回想』, 235-236頁。
- ⁵³ 村岡 哲『史想・随筆・回想』, 255-256頁。同235-236頁も参照。実際, 村岡哲のこの言述を裏づけるかのように, たとえば「國體思想の淵源とその發展」という講義のなかに, 次のような発言が見いだされる。

以上を以て本居の學問が Boeckh の *Philologia* と同一視せられるべきことは明らかであるが, なほ之を彼のかかる學問の動力となつた研究の精神について見てくるとき, 本居の學問がいかに *Philologia* の精神を體得したものであつたかを知り得る。本居の著書殊に玉勝間の中にはこの心境をのべた幾多の注意すべき言がある。例えば學問の傳統を故なしとして斥け, 「よしあしきを言はず, ひたぶるに古きを守るは學問の道にはいふ甲斐なきわざ」であるといひ, 學問に於いては師匠の説だからとて之に拘むべきでない。師説だからとて悪きを知りながら言はず, つつみ隠してよざまにつくるひをらむは, ただ師をのみ尊みて道をば思はざるものであるとなし, その門弟を誡めては, 「吾に従ひて物學ばむともがらも, わが後に又よき考の出で来らむには必ずわが説にな拘みそ。道を思はで徒に我を貴とまむはわが心にあらざるぞかし」と説いた如き, まことにこれ *Aristoteles* に擬せられる。「プラトオは愛すべし, 眞理はさらに愛すべし」(*Amicus Plato, magis amica veritas.*) てふ *philosophia* の精神と同じい。

村岡典嗣『國民性の研究(日本思想史研究V)』(創文社, 昭和49年), 99-100頁。

- ⁵⁴ 同238頁。